

# 質問紙調査の自由記述例（管理職）

<b>P11 表 2-1 教員の保育内容・方法に関する意識が変わったと感じたこと</b>
<b>&lt;幼児期の終わりまでに育ってほしい姿&gt;</b>
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を意識し、保育のふり返りや実践記録に個々の育ちを確認する指標となっている。
幼児の育ちの目安になる 10 の姿を示された事で、ドキュメンテーション等、理解して作成する事ができた。
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿があることにより小学校にも、幼稚園教育の理解が深まったと感じている。
幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿を意識し、各年齢毎に教育課程や指導計画を編成し、保育を考えていくようになりました。
3、4、5 歳における全ての保育内容が、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿へとつながっていることを意識していた。
計画案や週案等に意識して 10 の姿や育みたい資質・能力について記入している教諭が多くなった。
「ねらい」を意識するようになった。(幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を意識して)
幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿を捉えようとする事で今まで見えていなかった幼児の姿も少しずつ見えるようになり、10 の姿のつながりや発達のプロセスを考えながら幼児自身の思いや考えイメージを引き出そうとする意識が高まった。
特に 10 の姿に対しては、年長担任として、十分育っているか、育てられるか、どのように育てていけばよいか、考えたり悩んだりしていると感じる。
保幼小連携、接続研究(H30 年度、令和元年)携わる中で小学校教員、保育所、認定こども園教員との研修、学びあう機会を通して 10 の姿の共有すると共に子どもの育ちの芽を語る意識が高まった。
<b>&lt;幼児の主体性&gt;</b>
幼児が主体的に遊べる環境や自分たちで遊びや活動を展開していける話し合い(ふりかえり)の時間を工夫するようになった。
幼児が主体的に遊ぶことができる好きな遊びの時間の確保と遊びに対しての見取りと振り返り。
環境設定。地域との関わり。主体性を意識して、一斉保育の中でも配慮している。個を大切に保育参加を強制しない。
主体性を大事にする保育や遊びの中で幼児が何を学んでいるかをより意識するようになったと感じる。
子どもへの指示が少なくなり、子どもが自ら考え行動するような言葉がけや関わりを意識して行うようになった。
幼児が主体的に活動できるよう環境を工夫している。また、行事のあり方についても、主体性を重視し内容を工夫している。
子どもの主体性を重視するようになり教師の意図とのバランスを考えるようになった。
子どもの気付きやつぶやきをしっかり受けとめようとする教師の姿勢。子ども達の思いや発想を生かした保育の展開。
子ども達が試行錯誤する様子を見守ったり、環境構成の工夫に努めるようになった、「待つ」ことへの意識が高くなった。
主体性とは何かという視点での話し合いが多くなった。
<b>&lt;意識の高まり&gt;</b>
普段の保育の中、各担任、保育者の遊びや保育の考え方にはまだ古くからの考えが残る部分があるが、行事等を通して新しいことに挑戦しようとする意欲は見られるようになってきた。
要領と保育実践を改めて結びつけて捉えなおす、よい機会となった。
改訂の意味を理解するよう新教育要領をはじめ参考書等を読んでいた。
園外での研修に積極的に参加することで教師自らの気付きが多くなり、幼児への対応や保育内容の見直しなど意識が高くなった。
学校評価の形式を教育要領の内容を反映するものに吟味したことにより、個々の自己評価の際に気づきが多くなり意識が変わってきた。
多面的な見方、考え方を意識して行うようになった。
何を育てたいかを具体的に考えるようになった。
これまで実践してきた保育が更に明確化されたことで、自信を持って保育を行うことができるようになった。
職員から園長、主任に質問、相談が増えた。
保育内容、保育のすすめ方に工夫が見られるようになった。
<b>&lt;保育の記録や振り返りの工夫&gt;</b>
自分の保育を省察するようになってきた。
振り返りをしっかりと行えるようになり、課題が分かるようになった。
各自が記録をとり、それにもとづいた話し合いをおこなったり、事例として文章で残したりしながら新教育要領を実践していこうとしている。
県主催、公立、私立幼児教育研究協議会等に参加することにより、レポートを作成。保育の記録や振り返りができることにより保育内容に変化がある。
保育記録を、視点をもって書くようになった。

記録や振り返りの重要性を感じ、保育記録(写真等を含む)を基にした職員間の研修(カンファレンス)が増えた  
 これまで質の向上について意識して保育してきたことを改めて確認し、保育の振り返りを行い、次の保育に生かせるようにした。  
 自身の保育を見直し、保育のバランスが、とれる様に考えはじめています。  
 幼児に対する言葉かけ・援助について、時間をかけて、考えたり、話し合ったりするようになったと感じる。  
 エピソード記録をとるようにしてから、意識をもって保育を進めるようになってきている

### <環境を通して行う教育>

コーナー遊びを取り入れ、教材、環境設定などの工夫をしている。  
 教材の意味を意識し、教材研究を行っている。  
 保育者の働き掛けや受けとめ、環境や教材の提供など、幼児の興味、関心に沿って状況を見ながら柔軟に行うようになってきた。  
 職員が環境による保育ということをもっと意識するようになった。  
 園庭の遊びに絵を描く、製作コーナーなどを取り入れる工夫をした。  
 保育環境の改善提案が担任達から出るようになった。  
 教材の工夫について意識的に課題にする姿がある  
 行事と遊びとの関連、子供が主体的に遊びに取り組むための環境の工夫に意識的に取り組むようになった。  
 日々の環境を意識するようになった。他の学年とのかかわりが増えたように思う。  
 環境構成を見直し、園全体で取り組めるよう常に気付いたことを話している。

### <幼稚園教育において育みたい資質・能力>

「資質・能力を育てる」という視点から、保育内容や方法を考えるようになった。  
 従来、行事を主体とした保育になりがちであったが、目に見えない力を育てる(非認知能力を育てる)に徐々に意識が変わってきた。  
 幼児教育を通して育みたい資質・能力を子どもの姿からみつけようとするようになった。また、その気付きを情報交換し、語り合いが増え、保護者にもその視点で伝えていくようになった。自分の保育を評価の観点をもって振り返るようになった。  
 保育指導案を作成したり、保育を打ち合わせする際に、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や幼児期に育みたい資質・能力を参考にし、育ちの姿をとらえようとするようになった。  
 幼児の姿と育ちについて(10の姿や資質、能力)学び合い、実践や研究と関連させることに熱心となった。  
 常に、遊びや活動を行う時に、これまでに育った資質・能力は何か、本時間で得ることができた学びは何か、今後につながる資質・能力は何かを考えるようになった。その結果、活動が精選されてきた。又、多様になってきた。  
 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や幼稚園教育において育みたい資質・能力という言葉が教職員からあたり前のように話の中に出てくるようになった時。  
 資質・能力の3つ柱や10の姿を意識して子どもの姿を読み取るようになった。子どもが遊びの中で学んでいることを捉えやすくなり、環境・援助に生かしている。  
 “環境を通して行う”という幼児教育の基本を再確認するとともに保護者への話の中で育みたい資質・能力等を意識した伝え方にしている。  
 3つの資質・能力の育ちを意識するようになった。またこの視点においては小学校以降の教育とのつながりが大切だと痛感している。

### <主体的・対話的で深い学び>

子どもの発見や考えを受けとめ、子ども同士につなげていく主体的で対話的な保育が展開されてきた。  
 より主体的、対話的で深い学びにつながるよう、幼児相互のかかわりの場を充実させようとした。  
 子どもが考えたり、工夫したりできる時間を確保している。  
 今年度の本園の園内研究が、「主体的・対話的で深い学び」が副主題のため、職員間で研修を重ねてきた。教員も保育実践に当たり、意識して手立てや環境構成、援助などの検討、工夫を行っていた。  
 子どもが自ら心を動かして取り組みたくなるような環境や、やりたいことが実現できるような援助について工夫をするようになってきていると感じ、うれしく思う。  
 環境設定も主体的で対話的で深い学びを意識し、共通理解しながら環境を整えた。

### <小学校教育との円滑な接続>

小学校との資質・能力の接続をより意識するようになった。  
 幼小の教育連携(スタートカリキュラム)を意識し、年長児は入学後の状況を念頭に置いた取り組みをしている。10の姿を念頭に置いて取り組むようになりつつある。  
 幼小連携を大切に、子どもの遊びの中の遊びを見とろうとする姿勢や3つの資質能力を育む保育内容や環境について考える姿が育ってきたと思う。  
 年長(5歳児)担任は、小学校への接続、連携や幼児期のおわりまでに育ってほしい姿についてクラスの子どもの実態をふまえ、指導計画等を考えるようになった。

小学校への連続性、つながりについて、あらためて保育の中でそのことを意識し、こどもへの言葉のかけ方が変化した。(主体性)
<b>&lt;遊びの中での学びの理解&gt;</b>
保育案や記録等記入する時に子ども達の学びや目指す姿等が、明確になっているのを感じ、子どもの姿(良い姿)の気付きも増えたように感じます。
何をどのように学ぶのか(学ばせる工夫をどのようにすればいいのか)を意識して、保育内容を変えようとする意識をもつようになった。
保育評価を職員間で行い学びについて意見を交流する姿勢が強くなりみられる。
幼児をよく見て何を学んでいるかを捉えようとするようになったことが日誌からうかがえるようになった。
改めて「総合的な活動」「遊び」の中で、子どもの「学び」があるということの大切さを学びなおしていると思います。また、遊びの中の学びを意識し、保護者に伝えようとする気持ちが高まっているようです。
<b>&lt;カリキュラム・マネジメント&gt;</b>
より、育みたい資質能力を考え、計画実施し、カリキュラム・マネジメントを行うようになった。
PDCA サイクルを意識するようになった、ふり返りを保育の中にとり入れることが多くなった。
カリキュラム・マネジメント、評価に対する当事者意識が高まった。
時代が変化していても、子どもの育ちと保育内容の重要性は変わりません、着眼するところは、同じです。全国どここの園へ行っても同様に充実した保育教育が受けられることが当たり前です。意識だけでは目の前の子どもは変わりませんので、カリキュラム・マネジメントを通して育ちを見据え実践力を高めていきたいです。
カリキュラム・マネジメントを意識した週日案の作成及び振り返りができるようになった。
<b>&lt;教育要領で示されている用語や内容&gt;</b>
育てたいこと、意図、ねらいをより明確に意識できるようになった。
主任が教育要領の理解を深め教員をリードできるようになってきた。
教育要領で示されている言葉を使って、保育を語る姿が見られる。教育要領や指導書第3集が机上にあり、開かれている。
<b>&lt;プロセスの重視&gt;</b>
あそびを形でおうのではなく、過程を大切にするようになった、こどもの発想や気付きを引き出そうとするようになった。
就学までの育ちの過程を意識しながら、今育てたいことの柱をもって保育内容、方法を考えていくようになったと思います。
子どもの育ちのプロセスやその要因に着目し、内面の変容が結果に結びついていることを意識している。一人一人の学びや成長のとらえ方、他の教職員と喜び合ったり伝え合ったりする部分。
<b>&lt;教員間の共通理解&gt;</b>
新たに学ぼうとする姿が見られ、お互いに研修したことを共有しようとするようになってきた。
園内研のテーマに取り上げたこともあり、連絡会で子どもの実態や環境構成について話し合う機会が増えた、また保育の反省を生かし環境の再構成をするようになった。
新幼稚園教育要領移行期間から、様々な研修に行っては、自園の教育課程をこまめに修正し、全職員が新幼稚園教育要領について話し合いを深めていけるようになっている。
<b>&lt;指導計画の作成・改善&gt;</b>
3年間を見通した経験・学びの見直しを毎月行えるようになった。
指導計画作成の際に、指導書を参考にしながら、行った。
<b>&lt;その他&gt; 幼児の発達・幼児理解に基づいた評価・社会に開かれた教育課程・預かり保育の在り方</b>
<b>幼児の発達</b> …告示以前より個々に応じた保育を行ってきたが、告示以後、更に個々への理解を深めようとしていると感じている。
<b>幼児理解に基づいた評価</b> …子どもの主体性を大切にしていることは以前に変わらないが、これまで以上に子どもの姿をベースにした育ちの読み取り、それをもとに、はぐくみたい姿を明確にした教育的意図をもった働きかけに取り組んでいる。
<b>社会に開かれた教育課程</b> …“社会に開かれた教育課程”を実現する為に保育内容、教育方針を保護者、地域に積極的にアピールするようになった。
<b>預かり保育の在り方</b> …「教育時間の終了後等に行う教育活動」では、よりきめ細かな指導計画の作成とそれにとまない活動内容も深まっている。

## P12 表 2-2 幼児の様子が変わったと感じたこと

### <主体性の発揮>

主体的になってきている、考える力が育ってきている。

子どもが興味をもち“やってみたい”“おもしろそう”と取り組むことが多くなった。

自発的に周囲に働きかけ、考え、選び行動する意欲が高まっている。

特に地域の方々との触れ合いや関わり、挨拶など、今までよりも子ども達から積極的に行えていると感じる。

自ら生活や遊びに見通しをもったり、役割をもつ意識が高まった。

主体的に取り組んでいるときの子どもの表情や動き、などがイキイキとしている。

幼児が主体的に遊びに取り組んだり、試したり工夫する姿が多く見られる。

主体的、対話的、深い学びができる保育をめざしてきた。幼児が幼児期本来の“あそび”に主体的に取り組むキラキラした目と出会う機会が多くなった。

やりたいことに向かって自ら友達や教師に向かって何かアクションを起こすようになり、言われて動くのではなく自分から行動することが増えてきている。

自分で考える、自分なりに試して、自信をつけていくことが増えた。

### <言葉による表現、伝え合い>

幼児が良く質問するようになった。

子ども同士で話し合いができるようになって来た(年長児)。

安心、安定のある教師との関係の中から、自信をもって発言したり、年齢に応じた探究する活動が増え、年齢に応じた語り合い伝え合いが増えた。

自己発揮する力、言葉で伝える力がどの子にもついてきているように思う。

職員が子ども達の言葉をよく傾聴することで子ども達はより安心して自己主張するようになった。またよく傾聴する子も増えた。

振り返りの時間に、積極的に発言することが増えた。友だちのことを気にするようになり、遊びの中で話し合うことが増えた。

幼児が自分の思いを表現できるように学年に応じて教員が待つことを心がけることにより、以前より幼児が自ら思いを表現・伝えようとするようになったと感じている。

質問やつぶやきが多くなった。実際は増えたのではなく聴く力がついたのかもしれない。

自分なりのことばや表現でのびのびと伝えるようになった。自分と人とは違うことや違ってよいということを知り、特別に支援を要する子どもたちと共に生活する中でともに育ち合う姿がより大きくなった。

対話を大切にすることで、子ども同士の会話もふえたのと自分の思いを伝える力がよりついたように思う。

### <意欲の高まり>

他の幼児の考えに触れ、自分の遊び、友達との遊びをより楽しむ姿が多く見られるようになった。

夢中になって遊ぶ姿が見られるようになった。

保育者の声かけや支援のポイントによって「もっとチャレンジしたい」ががんばってみたい感が増してきた。

今まで、意欲が薄かった子どもがイキイキしてきた。

幼児に対しての適切な評価が出来るようになり、それにより幼児が生き生きとした活動が増えた。

幼児の気づき、その幼児なりの表し方、思いの伝え方など受けとめられたり認められたりすることで、表す喜びを感じ意欲的になり豊かになってきたことを感じる。

以前から、子どもの笑顔、満足感、自尊感情の高い園教育が進められていて、笑顔・意欲は、十分にある。

### <協同性の育ち>

行事の量や内容、ねらいを見直したことで、遊びの時間が確保(保障)された。それに伴い、友だちとイメージを共有して遊び楽しさを実感したり、遊びを創る楽しさを実感する姿が増えてきた。

自由な発想や発言が豊かになった。特に年長児においては、自分たちで物事を進める意欲が育ってきている。

共同的な遊びを通し相手の話を聞いたり共感したりするようになってきた。

5才児は、よく協力しようと話し合うようになった。

主体的に話し合う時間を十分に取るようにしたことで、協同性が高まった。

### <試行錯誤・工夫>

自分達で考え、工夫する(しようとする)姿が見られるようになった。

主体的に遊ぶ姿、試行錯誤しなから夢中になって遊ぶ姿が見られるようになった。

自ら環境に関わり主体的に遊べる子に育つよう取り組んできたので、その取り組みを積み上げ、子どもたちがずい分自ら環境に関わり遊びを選び、遊びを工夫し広げていける力や自分たちの生活を作っていく力がついてきたように感じる。
教師の環境の工夫、援助の工夫によってじっくりと楽しむ、試行錯誤することが増えた。
自分で考える、自分で工夫することが認められ、満足感を感じている姿がある。
<b>&lt;好奇心・探究心&gt;</b>
やってみよう、どうしてなんだろうと意欲や探究心をもって園生活や遊びに取り組むようになってきている。
子どもたちが自ら調べたり教師に聞いたりすることが多くなったと感じる。
「おもしろいことを考えた」という言葉がよく聞かれるようになり、考えたことをやってみる姿が増え、そうした言動を面白がるようになった。
挑戦する力、粘り強く取り組む姿など、遊びを通して育ちが見られる。
思ったこと、考えたことを自分なりに調べたり追及する姿が増えた。
<b>&lt;遊びこむ姿&gt;</b>
幼児が主体的にじっくりと遊べるように環境作りをするようにしている。その結果、子ども達が自ら考えたりじっくりと遊んだりするようになってきた。
教師がより意識して保育内容を工夫することで、遊びに夢中になったり熱中したりする姿が多く見られる。
興味のある遊びに、集中して遊び込む姿が見られるようになった。
今までの変わらないところもあるが深い学びへといざなうタイミングで教師が声をかけることが多くみられるので、とことん遊び込むことがふえたかなと感じます。
地域の人材等を活用することで、遊びの広がりや深まりが見られる。
子どものやりたいことが大切にされ、じっくりと取り組んだり過ごしたりできるようになったと思う。
<b>&lt;思いやる心の育ち&gt;</b>
相手の存在を受け入れることができ、思いやりの気持ちが持てたり、自分の気持ちにも時には折り合いがつけられる子どもが増えたように感じる。
自分なりのことばや表現でのびのびと伝えるようになった。自分と人とは違うことや違ってよいということを知り、特別に支援を要する子どもたちと共に生活する中でともに育ち合う姿がより大きくなった。
<b>&lt;その他&gt; 様々な気付き、発見の喜び・自信・集中力の高まり・安定した情緒・教師との関係の深まり ・ 基本的生活習慣の習得・非認知能力の育ち・次の学年の意識</b>
<b>様々な気付き・発見の喜び</b> …社会生活との関わりを生かした生活や遊びが展開されるようになった。(教員が環境等工夫したためもあるが)
<b>自信</b> …自分で考える、自分なりに試して、自信をつけていくことが増えた。
<b>集中力の高まり</b> …一つの活動に集中している時間などが増えたが、そのぶん活動のメリハリ(時間的な)がつかない事が増えてしまったように感じる。
<b>安定した情緒</b> …毎日、保育の終わりには振り返りの時間をじっくりとっているが「楽しかった」といって帰る子が多くなった。
<b>教師との関係の深まり</b> …幼児と教師との関係が深まり、担任以外ともよく話をしたり頼りに行ったりする姿が見られるようになった。
<b>基本的生活習慣の習得</b> …教員が意識することで、基本的な生活習慣など望ましい姿が身に付いてきている。
<b>非認知能力の育ち</b> …年長時の終わりまでに10の姿のどの段階までを目指すかを一致して取り組んでいるため、子どもたちの非認知能力においても伸長して来ている。
<b>次の学年の意識</b> …次の学年(年長は小学校)を意識するようになった。「人との関わり」「折り合いをつける」「集団での学び合いの良さ」「深く考え、自己決定すること」が意識できるようになってきている。

<b>P13 表 2-3 新幼稚園教育要領に基づいた保育を展開する際の困難さ</b>
<b>&lt;教員の育成&gt;</b>
「深い学び」というところで、保育の中で意識できているかという結びついていないように感じる。
資質・能力についての共有や学びのみどり、主体的で対話的な深い学びの理解が難しい。
教師の力量により、活用をしっかりとできている者と今まで通りの考え方ですすめようとする者がいる。研修だけでなく、個々の教師への個別の指導、助言が必要である
管理職(園長・副園長・主任等)の働きかけをどのようにしていくのが思考中です。
評価、記録も大切だが、保育内容(活動)も充実しなければならない。教諭の育成も課題である。

教員の保育力(資質)に差があることは、あたりまえだと思うが、それをうめていくための研修(園内研)の在り方に、むずかしさを感じる。なかなか、自己研修はしていないように思う。
副担任、支援員を含めた教員一人一人の保育力の一層の向上が重要であること。常勤職員(担任)と非常勤職員(副担任、支援員)の打ち合わせ、相互理解を深める時間や場の確保
研修や園見学など、若い職員が刺激を受ける場を設けることが難しい。今までの文化や体質を変えてくためにも「面白そう!」と感じられる保育に触れる機会を作ってあげたい。
資質、能力、幼児期の終わりまでに育てたい 10 の姿、などの内容の理解が追いつかず、小学校を意識しすぎて幼児教育の本来の姿をつかめない教師もいる。預かり保育により、研修時間が十分確保しにくい。
担任の先生達の質の向上のための具体的な研修のあり方、研修のすすめ方など具体的に知りたい。(短い時間での実りある研修のあり方)
<b>&lt;小学校との連携・接続&gt;</b>
小学校教育との円滑な接続。交流は行っているのですが、幼児教育の理解、育ってほしい姿に基づいた保育等について等、また、円滑な接続について話し合いの時間を確保するのが難しい。
小学校との接続において子ども同士の交流、職員間との情報交換など必須にしてほしい。
幼児教育の中での学ぶというイメージもうまく伝えられない、小学校の先生と 10 の姿について語り合う場が作れない。
小学校の現場の先生方との学びに観点を置いた研修会の中で、やはり伝え方の難しさを感じる。
保幼小接続について、どのように話し合っていくべきか、難しいところがある。(小学校や保育園はいそがしいと言われることが多い。また、私立の保育園との関わりも難しいところがある。)
小学校との円滑な接続について、どの様に進めていったら良いか、難しい。(働きかけ)
併設小学校との意識の共有
小との接続は、まだまだ工夫の余地がある。しかし互いの多忙感も否めず、実行性と効率性、そして持続可能な取り組みについてさらに学びたい。
小学校への接続、幼小連携、10の姿の発信、共通理解(小学校との)がとても難しい。働き方改革で幼小連携が少なくなっているように思われる。
特に小学校教育とのつながり部分で併設の市なのでよくできてはいるか。アプローチ、スタートカリキュラム編成で少し困難のところを感じている(小学校教員の意識が薄い)。
<b>&lt;教員間の共通理解&gt;</b>
他園からの異動職員が十分理解して保育を展開することに困難さを感じている。
育みたい資質、能力の具体的なイメージがつかみにくく、経験年数の違う職員間で共有したり、共通理解したりすることができにくい。
教師間で認識、理解の差が大きく、園としての教育観、経営に反映させていくことが難しい。また、小学校や一部の幼、保、園は解釈が正しくない言動が幼保小連携推進協議会等でもみられる。
副担任、支援員を含めた教員一人一人の保育力の一層の向上が重要であること。常勤職員(担任)と非常勤職員(副担任、支援員)の打ち合わせ、相互理解を深める時間や場の確保
職員の年齢が若い人ばかりになって共通理解しにくい・通常の業務の中に、預かり保育もしているので会議をもつ時間が少なくなった。研修時間の確保が少ない。
これまで本園で実践してきたことですが、用語、文言などについての職員間の共通理解の必要性を感じることもあるため。
全体的な計画で、今、教育時間以外の保育の時間の計画をつくっているため、まだ、漠然としている部分もあり、みなで共通理解するには、少し時間が必要と感じている。
教諭らと共通理解し保育について話し合い考え合う時間の確保が困難。新教育要領と関連づけるまで深く話すことの難しさ、目の前のこと情報交換、予定の確認等でおわることもある。
<b>&lt;カリキュラム・マネジメント&gt;</b>
教育課程の編成の具体的な作成上の方法がよくわからない。
カリキュラム・マネジメントの具体的な方法、工夫が知りたい。
「5 領域」と「育みたい資質・能力」と「10 の姿」というそれぞれの内容を全体的な計画にどう反映するとわかりやすいのか悩んでいる。現実それぞれをそしゃくしきれていない。
これまでの教育課程への反映
各時期における保育のねらい及び内容を具体的に描く(言葉に表す)ことが難しく、作成しているものに自信がもてない。
5 領域だけの方が単純でわかり易い。10 の姿や 3 つの柱などほどの研修に行っても何となく後付けな感じがする。計画としては立てづらい。
カリキュラム・マネジメントがうまくできていない。理由:70 年続く園で、園のめざす“イキイキ、のびのび”を目標としたカリキュラムで、毎年新幼稚園教育要領に沿ったカリキュラムを付加修正しながら実践していますが、行事(昔から続く)が多く、うまくカリキュラム編成ができていないと思う。

<b>&lt;新幼稚園教育要領の理解や実践&gt;</b>
今回より多くの視点が入り、言葉もたくさん示されています、現場の実践レベルで扱うことには難しさを感じています。
十分に理解できていないため、具体的にどうしたらいいかわかっていない若年教員(中堅、主任も含む)もいる、意識の問題
行事などもあり、今までの保育から変えていくには、1 クラスの人数、親のニーズ、教諭のスキルと多くの問題点があり、なかなか思うように新教育要領を実践していますという状態になれないのが今の状況です。
資質、能力、幼児期の終わりまでに育てたい 10 の姿、などの内容の理解が追いつかず、小学校を意識しすぎて幼児教育の本来の姿をつかめない教師もいる。預かり保育により、研修時間が十分確保しにくい。
園児数の減少により、集団性の刺激が少ないことを考えると教育要領が生かすきれない部分があることを感じる(個と集団としてはむしろかしい)。
「主体的・対話的で深い学び」「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」と実際の教師の中に見られる幼児の姿や事例とのつながりに確信がもてない部分がある。(実践を積み重ねていくことで理解が深まっていくと思われれますが)
職員の中で、迷いや不安が見られる。
<b>&lt;幼児期の終わりまでに育てほしい姿の理解や実践&gt;</b>
幼児期の終わりまでに育てほしい姿について、どの子にも 10 の姿を到達させたいとつい考えてしまう。要領の主旨と評価の現状が自分の中で矛盾しているように思う。
10 の力(幼児期の終わりまでに育てほしい姿)を年間通して意識して計画、保育するのが難しい。特に 4 歳児。
10 の姿と 5 領域との関連が不明確であり、理解できていない。
10 の姿が出てきたことで、小学校の先生が幼稚園教育に関心をもつきっかけになったとは思いますが、10 の姿にしばられすぎなくてもよいのではないかと思う。
現場として、具現化していくことの難しさ、一方では楽しさも感じている。いわゆる「10 の姿」の解釈がまちまちになりやすいこと、特に小学校では到達目標としての捉えになりがちであること。
<b>&lt;具体的なイメージ・やり方&gt;</b>
「幼児期において育みたい資質、能力」を、実際の保育の中で、どう具体的にイメージしていくのかむずかしい。
小学校指導要領のように、もう少し具体化して示していくことが、これからは必要と思います。
カリキュラム・マネジメント、アクティブラーニング等は具体的な実践と結びつきにくいと感じる、それよりも子どもの「耐性」をどのように身につけるかといった基礎的な事の具体的な実践報告を知りたい。
メディアでも取り上げられている非認知的スキルは子どもたち自身が体験することで感じとることが大切で、環境の重要性もさかんに言われていますが、具体的なイメージがつかめていません。
5 領域全ての具体的な取り組みを知りたい
今までの保育内容でも該当している内容はあると思うが、どこをどう変えていくと良いのか、具体的に分かるとやり易い。
<b>&lt;時間確保&gt;</b>
遊びの質を高めるための教材の工夫等に十分な時間がとれない。
教職員が日々、忙しく、教職員同志ゆっくり話し合う時間がなかなかとれない、
職員の年齢が若い人ばかりになって共通理解しにくい・通常の業務の中に、預かり保育もしているので会議をもつ時間が少なくなった。研修時間の確保が少ない。
教材研究開発、担任同志の話し合い、特別支援の介助員との話し合いなどたくさんやりたいことがあるが十分な時間がとれない。
日々の雑事に追われ、自立心などの非認知能力が育つのをじっくりと見守る余裕がない。
<b>&lt;幼児主体の保育&gt;</b>
好きな遊びに没頭し、主体的に関わる姿勢が育まれる一方、場面、活動の終了時、移行時における「気持ちの切り替えが」難しいことが増えていると感じる。(メリハリ)
若い職員が多く、主体的な活動の展開が難しい課題活動が多くなっているように思う。
子どもが、先生主導で来ていたので、自分達で積極的、遊びを進めていこうと出来ないの、先生がどのようにしたらいいのか、環境や言葉かけを皆考えている状態。コーナーも作った。
今まで培ってきた保育技術の上に立って、より主体的に物事に取り組む姿勢を生む言葉かけや環境構成の工夫が必要な、少しずつ事あることに考え方の持ち方について話し合いを何度も重ねている。
子どもの主体性と教師の意図性のあんばい、見極め。
<b>&lt;教員数/配置&gt;</b>
時間の確保、園児数減少とともに職員数も減り、研修や園内研を充実させるほど職員一人一人への負担は大きくなっている。

職員数が少なく、2クラスの担任がともに異動となるなど、毎年職員体制が変わる、正規の職員ではないなど積み重ねがしにくい。保育内容の充実のためには教員の資質向上が必須だが、臨時雇用員がクラス担任をしている状況で、配慮のいる園児が多数在籍しているが人員配置も十分でない。努力をしているが限界も感じる。
<b>&lt;保護者の理解推進&gt;</b>
保護者への発信、今までと方法(行事のあり方)をかえると(特に行事など)理解が難しい。
保育の可視化、保護者への理解
<b>&lt;教員の今までの保育からの切り替え&gt;</b>
今までの保育(設定保育)からの切り替えが出来にくい教員がいる。
昔から大切にすべきこと、根本は変わらないと思うので困難はあまり感じていないのですが、視点が「5領域と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と2つあるように思える。その関連性のとらえ方が難しい。ついつい5領域で考えてしまいます。
<b>&lt;特別な教育的支援の在り方&gt;</b>
コミュニケーションの取りにくい外国籍の園児への指導
特別支援児が増えている中で従来の保育の展開が難しいことがある。(特に年長組で話し合っ進める活動が行いにくい)
<b>&lt;個々に合わせた保育&gt;</b>
子ども達一人一人の性格に即した対応力を醸成して行くのが今後のテーマと考えている。
個人差を個性として伸ばさせるかにとまどいを感じる場合あり。
<b>&lt;振り返りや評価方法&gt;</b>
担任個々の理解を共有し、日々の保育の見通しや、振り返り時に新要領に立ち戻ったり皆で協議したりすることがあまりできていない。
評価のポイントを詳しく知り、経験年数によらず、育ちを捉えられるようにしていきたい。
<b>&lt;預かり保育&gt;</b>
預かり保育(教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動)の在り方について、通常保育とのバランスや両立がむずかしいと感じます。
預かり保育の充実と教育時間の保育は明らかに違うと思うが、希望者を対象に行っている預かり保育の充実の具体的な方法がつかみにくい。
<b>&lt;その他&gt;園環境の制約・社会に開かれた教育課程</b>
園環境の制約…さまざまな事の進め方で現実的、環境的に我園では、そこまで発展、展開させるのは、無理なことも多く、どのようにしたら良いか悩むところです、自分達の考えなりに工夫したいとは思っています。
社会に開かれた教育課程…「社会生活とのかかわり」の姿を育む手立てが、十分にカリキュラムに位置づけることができていない。

## 質問紙調査の自由記述例（担任教諭）

<b>P30 表 3-3 自らの保育内容・方法に関する意識が変わったと感じたこと</b>
<b>&lt;幼児期の終わりまでに育ってほしい姿&gt;</b>
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)をより意識し保育をするようになりました。とても分かりやすく、10の姿を1人1人の子どもに当てはめながら成長と課題を把握しています。
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明確に出されたことで、視点を意識して指導を行えるように工夫したり、小学校との交流の際に子どもの姿を共有化しやすくなり、より一層幼小連携がスムーズに行えるようになったと感じる。
手紙等で保護者に伝えたり、日々の保育を振り返ったりする際の視点となった。以前より伝えたいことがより明確になったと感じる。
10の姿を目安にして、「この姿はどの力につながるのか」を自分なりに考えたり、他の先生の視点から学んだりすることができるようになった。
週案や学期の振り返りのときに、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を念頭に置くことで自分の保育にどの視点が欠けていたか、何に偏っていたかを考える手掛かりになり、翌日からの保育内容に活かそうとする意識が変わった。
幼児の主体的な姿を意識して記録をとったり、次の保育を考えたりするようになった。どんな力が今育とうとしているのか考えて幼児の姿をみることができるようになった(10の姿から)。



特に5歳児保育の中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されたことで、大事にしていることを再確認したり、ねらいが片寄らないよう総合的に考えたりできる。
10の姿を意識して保育する中で、これまでの保育がいろいろな力を育むことにつながっていることに気がつけたので、より自信をもってとりくめるようになったと感じる。
幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を意識することで保育の中でやるべきことが明確になり、それに伴って子どもへの声掛けもどうしたら伝わりやすいかと考えることが増えた。
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や幼児教育において育みたい資質や能力を理解していることで子供への言葉がけが変わった(褒めることが多くなった)
<b>&lt; 幼児の主体性 &gt;</b>
子どもが「やりたい」「してみたい」と思えるような遊びを計画したり、子どもの声を聞き遊びを展開していくようになった。
教師側から提供する保育が少なくなり、子どもたちの遊びの中から生まれたものを、翌日の保育に生かすことが多くなった。
教師からの提案、働きかけだけではなく、子どもたちの生活や遊びの中での姿から展開したり、進め方を変更したりする事が増えたように感じます。年齢によっては、子どもたち自身で遊びや活動を作っているような援助の方法を意識するようになった。
子どもの主体性を大切に、出す環境もできるだけ多様にして、子ども自身が選んだり、工夫したりできるようにした。子どもの姿から、保育を考えていくように、より意識した。遊び一つ一つをよりいねいにみとろうとするようになった。保育の記録のとり方を変えた。
カリキュラムの見直しを行い、子どもたちが主体的に遊び込めるように、自由遊びの時間を長く設けた。
子どもの主体性を大切にすること。一方的な保育にならない様、子どもたちと話し合ったり、やりたいことを大切にしている。
幼児の興味関心に自分自身も一緒に楽しみ、またそうすることで、幼児一人一人の主体性や心の動きを意識することができるようになった。
一人ひとりの気づきを大切に考えるようになった。
子供主体、子供の言葉、内に秘めた気持ち(言葉にできない時の表情…)を今までよりも深く観察するようになった。
幼児同士の言葉でのやり取りを時間をかけ、なるべく見守り、言葉で気持ちを十分に表せる様な援助を心掛けた。
<b>&lt; 環境を通して行う教育 &gt;</b>
育ちの記録をとる時に、どこの育ちを感じたのか教育要領を見直すことが増えた。子どもたちのようすを読みとってそこから環境を作っていくという意識が高まった。
環境を通して行う保育をより意識するようになった。幼児にかかわる全ての物、人、空間、全てを環境として考えどう展開していくか深く考えていきたい。
環境や自然への気づきや、そこから感じることで保育へのつながりを大切にしたい。
子どもたちが友だちとコミュニケーションをとり、深い学びができるように“環境”を意識し保育に努めるようになった。
幼児が自ら考え行動できる環境づくりを意識している。
様々な材料を準備するようになった。
環境から子どもが何を学び、感じることができるのかを考えながら、より環境構成を考えるようになった。
用意しすぎた環境にしないよう、意識している。子どもが自ら見つけ、考えられるような遊びの場となるように、考えるようになっている。
幼児期に育ってほしい姿を意識し、現状の子どもたちの姿を考慮し、教材や環境を整えた。
環境の大切さを改めて感じ、教材研究をする際も子どもの動きや反応をみながら、変更できる柔軟さをもたせられるようにした。自分自身の知識や資質向上の必要性を感じる。
<b>&lt; 幼稚園教育において育みたい資質・能力 &gt;</b>
資質・能力の3つの柱について自園を振り返り、課題や育てていきたい力などを話し合ったことで職員間で共通の視点をもてた。
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や幼児教育において育みたい資質や能力を理解していることで子供への言葉がけが変わった(褒めることが多くなった)
幼児教育において育みたい資質・能力が明確になったことで、子ども達がどんな力を発揮しているかが見とりやすくなった。課題も分かりやすく、手立てを考えやすい。
育みたい資質、能力について意識したり、それらをもとに10の姿も含め小学校の先生方に伝える、伝わる事を心がけるようになった。
定期的に幼稚園教育において育みたい資質、能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」での保育の振り返りを行うようになり、様々な場面で学びがあると実感できること。
幼児教育において育みたい資質・能力を意識し、そのための方法やアプローチを子どもに合わせて変えていこうとするようになった。
一人一人の資質、能力を育むよう、遊びの中でもっと保育を見通し、展開していけるよう、心掛けていかないといけないと思った(現代に目を向ける)。
この時期に伸ばしたい力や発達させたい力等が明確になったことで、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿と合わせて、週案などを作る時に意識するようになった。

資質・能力及び幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿等、明確に示されたことで、自分の保育の振り返りの視点となりやすいを感じる。
「育みたい資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」という明確な視点ができ、それらのことを意識して保育内容などを考えたり振り返ったりするようになった。
<b>&lt;目標の明確化&gt;</b>
子どもの姿をよみとろうとする時、保育内容を考える時の視点が広がったように思う。
遊びや教材を考えていく際のねらいや育ってほしい姿が具体的にイメージしやすくなった。
幼児期に大切な取り組み、課題など改めて見直す機会となり、自分の保育が明確になったところもあり、今後に活かしていきたいと感じた。
子どもの姿を当てはめやすくなり、保育環境を整えたり、指導がしやすくなりました。
三つ柱が細かく示されているため、子どもの様子の組み取り方や何を伸ばしていけるかなど明確になり、分かりやすいと思いました。
具体的な目標を念頭において、保育を行うよう意識するようになりました。
1人1人の子ども理解が深まり、より個別の関わり方が増した様に感じる。育ってほしい姿がより明確になった。
「10の姿」や、資質・能力として、具体的な文言で記されているので、保育を振り返る時に、明確な視点としてとらえやすくなった。
先々の社会状況を見通して、必要な力、基となるところを幼児期からしっかり育てていかなければと感じた。保育内容や方法が変わるといふより、今まで大切にしてきたことがより明確になったと捉えている。
これまで意識して保育に取り入れていたねらいや目標をより深く意識することを心掛けるようになった。
<b>&lt;保育の記録や振り返りの工夫&gt;</b>
他のクラス、学年の職員と振り返りや子どもの姿を共有する機会が増えている。
以前よりカリキュラムを意識し、振り返りから次への課題を考え、見直しを持った保育により重点を置くようになった。
保育や幼児の姿を評価する視点が明確になり、職員間での振り返りが充実した。
子どもたちの思いや考え、育ちに十分時間をかける余裕が出てきて、日々の記録の仕方を変えることで、自分自身の保育を振り返る。
具体的な視点に基づいて、幼児の姿や保育の振り返りを行うことができるようになった。また、他の教員との保育についての情報交換、意見交換がよりしやすくなった。
自身の保育の振り返りの大切さをより意識するようになった
振り返りを大切にして、振り返りから学んだことを次の活動につなげていくように意識している。
振り返りを保育に取り入れ、環境構成や援助の仕方の見通しがもてるようになった。
具体的な視点に基づいて、幼児の姿や保育の振り返りを行うことができるようになった。
保育内容等を特別変えたことはありませんが、子どもの姿からそれが「育ってほしい姿」のどこにつながっているのかを考えたり、自分の関わり方を振り返ったりすることはあります。
<b>&lt;小学校教育との円滑な接続&gt;</b>
小学校以後の学習との接続をより意識し、保護者にも保育の中での学びをそうした視点で伝えることが多くなった。
3才の終わり、4才の終わりの姿も意識しつつ、5才終わりの姿から小学校まで見通すことの大切さを感じる。
幼児期の育ちを小学校にどのように伝えていくべきかを意識するようになった。
育みたい資質・能力について小学校教育とのつながりを考えるようになった。
10の姿や小学校以後とのつながりを意識しながら、子供の姿を捉えたり関わったりするようになった。
小学校への接続を意識するようになった。自分で考えて行動に移すことを大切にしている。
指導計画の作成や要録の記入の際、小学校へどう引き継いでいくのか、連携をしていけばいいのか意識するようになった。
保幼小連携の大切さを学び、小学校の先生に向けて公開保育を行いました。
育みたい資質・能力について意識したり、それらをもとに10の姿も含め小学校の先生方に伝える、伝わる事を心がけるようになった。
小学校へとつなげていく支援をより意識するようになった。
<b>&lt;教育要領で示されている用語や内容&gt;</b>
教育要領を、子どもの評価だけに用いるのではなく、教師自身の評価や保育内容の見直しに活用するようになった。
育ちの記録をとる時に、どこの育ちを感じたのか教育要領を見直すことが増えた。子どもたちのようすを読みとってそこから環境を作っていくという意識が高まった。
新幼稚園教育要領の内容を意識した保育構想を立て、遊びの中で幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を振り返りの視点とし、学びにつなげていくようにしている。
新しい教育要領を見直すことによって、自分が教育要領に沿って保育ができているかを再確認したり見直、改めるようになったこと。
新幼稚園教育要領に合わせた保育ができるように(特に変更や言い表し方が変わっている点)意識している。

幼稚園教育要領や解説を読み直し、内容や方法から子どもの関わりを考えたりして保育をしている。
教育要領を参考にしながら週案や日案などを作成するようになった。
変化を確認する為に教育要領を手にとる機会が増え、日々の保育と育てたい姿とをより意識し、関連づけて考えるようになった。
自分のしていること、これまでにしてきたことが、新しい教育要領の中ではどのように位置づいているのか、足りないところは何かを振り返ったり考えたりするようになりました。
新幼稚園教育要領をよく読み、振り返りをしたり、保育内容を考えたりすることが増えた。
<b>&lt;意識の高まり&gt;</b>
新しく変わった内容を意識したり、研修で学んだことを取り入れようとしている。
これまでの取り組みをより自信をもって行うことができた。
保育所、こども園の動向など、視野を広げた研修を心掛けるようになった。
研修会に積極的に参加しようと考えて参加している
保育とは何かを、他人に説明しやすくなりました。
園内研や区の研究のテーマで新幼稚園教育要領、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を扱っているため、考える機会が増えた。
子どもが、何に対して、どんな反応関心を持っているのか、より深く知りたいと思うようになった。
これまで以上に設定保育のすすめ方について、考え直す必要があると感じました。
初めて保育に関わり、以前と比較することはできないが、遊びで育てるということを実感している。
伝えた事が他の場面でも活用されているか気にするようになりました。
<b>&lt;遊びの中での学びの理解&gt;</b>
日々の遊びの中で子どもたちが何を学んでいるかということを前よりも意識して保育し、足りない所を計画的に取り入れるようになった。
遊びの中で、子どもたちのどの部分が今育っているのかを意識したり考えたりしながら関わるようになった。
子供一人一人の遊びの内容からどこを楽しんでいるか、どう伸ばしていくか意識を強くするようになった。
最初から全て教えるのではなく、失敗や試行錯誤を繰り返していく中で、子どもたち自身が考えたり気付いたりする、経験を大切にできるよう意識するようになった。
子どもの興味、関心や、遊びの中でどのようなことを学んでいるのかを意識して見るようになった。
遊びの中から、様々なことを経験できる保育をしたいと感じた。
活動、遊び等を通して、子供が何を学んでいるのか、意識するようになった。
子どもの姿から、どんなことを感じ、学んでいるかより、よみとろうという意識がもてるようになった。
遊びのひとつひとつが、どの力につながっているのかを意識するようになった。
幼児の体験に基づく学びについて、よりそのような経験や葛藤経験ができるように工夫していきたいと思うようになった。
<b>&lt;主体的・対話的で深い学び&gt;</b>
”主体的・対話的で深い学び”を意識して、環境や教師としての関わりを考えて保育をするようになった。
子ども達の対話的で深い学びを更に意識するようになった
主体的・対話的で深い学びを念頭に活動が展開していくよう意識するようになった。(子どもの気付きを導きねらいに向かっていく保育)
主体的、対話的な学びにつなげるための教師の援助のあり方(私自身は幼児の気付きや育ちの前に、ヒントを出したり、手助けをしたりしてしまいがちなので、見守りの大切さ、環境の再構成の大切さを感じています。)
“主体的”“対話的”“深い学び”という3つのキーワードをいつも意識するようになった。
主体的・対話的で深い学びの視点から幼児の姿をみるようになった。
主体的・対話的で深い学びができるようにするための教師の声がけや話し合いの持ち方。
「深い学び」というところを意識するようになった。
子どもの主体的・対話的で深い学びをみとることを意識し、発達や子どもの興味・関心に合った人的・物的環境を整えるようにした(以前よりも具体的に意識するようになった)。
対話的で深い学びができるように保育を意識している。
<b>&lt;長いスパンでの成長や発達&gt;</b>
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が示されたことで、3歳児の保育に関わりながら、幼児の発達していく方向を意識するようになった。
幼児の姿、成長を長いスパンで考えるようになった。
単に小学校へ引き継ぎ…ではなく、10の姿をもとに、細かい点での成長や長いスパンを見据えての活動をより意識するようになった。
進級してからのことも考えながらの見通しをもった保育を意識するようになった。

子どもにとって、何が1番必要か、特別に必要な支援は何なのかを考えて、保育の中で重点を置く所を考えるようになった。子どもの将来のことを考えるようになった。
保育の連続性や広い観点からとらえていくことなどの意識が強くなった。
子ども一人一人の個性や得意なことをのばし応用力として今後の人生に活かせるようにするにはどういったことを伝えれば良いかを考え指導するようになった。
その年齢だけ(担任する1年間)ではなく、幼児がその先、どのように育てほしいか、どこを課題にしてつなげていくかを考え、保育内容やあそびを考え、取りくめるようにしていくようになった。
幼児期から高等教育までの学びの連続性を意識するようになった。
0歳児～5歳児までのつながりが大切になってくること。保護者、地域との連携、支援が必要なこと。
<b>&lt;幼児理解&gt;</b>
子供たちと一緒に過ごす中で子どもたちの発見からの行動から気づかされるが多々あった。
幼児が何を楽しんでいるのか、何を思っているのか、より色々な方面から読み取るようにしている。
子供ひとりひとりの存在を認めたり、持っている力(自信等)を引き出したりできるような場などの意識をもって取り組むようになったと感じる。
問題点ばかりに目を向けるのではなく、子ども1人ひとりの良さをより多く見つけられるよう深く関わるように意識するようになった。
幼児の姿をより具体的に細かく理解しようと意識するようになった。
普段の子どもたちの生活を見ながら、活動を工夫するようになった。
益々一人ひとりと向き合い、遊び中でどんな風に遊んだり友達と関わっているかじっくり見るようになった。
一人一人のいろいろな姿に気を配り、認めたり、周りに発信する意識をよりもつようになった。
より一層幼児理解に基づいて保育の内容や方法を考えるようになった。そして、日々の保育について振り返りを行い改善していこうと意識するようになった。
子どもの姿を多面的に捉え、内面理解や遊びの発展につなげられるようになってきたように感じる。
<b>&lt;幼児の発達&gt;</b>
改めてこれまで本園で大切にしてきた保育の意味を再確認し、発達の流れの中で子どもの育ちを支えていこうという意識が高まった。
子どもたち1人ひとりの育ちがどうなってほしいか、どうしていきたいか、を考えるようになった。
子どもたちの成長のために必要なことが改めて再確認でき、育てほしいところを今までよりも考えながら保育をするようになりました。
1つひとつの活動のねらいや内容を見直し、子どもたちの育ちをより丁寧に考えるようになった。
新幼稚園教育要領を何度も読んだり、研修に参加したりしたことで、保育の現場で、自分の子どもに対する言葉掛けが、何を育てることにつながるのか考えるようになりました。
0歳からの発達、身体を動かす遊びに意識するようになりました。
子どもの発達段階や保育目標などを、明確、且つ具体的に捉えるようになった。
子どもの姿(動き・言葉)からどのような発達段階であるのかより丁寧に読み取るように心がけている。用意した環境の1つ1つにどんな意図があるのか、(C)にとってどのような意味があるのか、どんな育ちにつながるのかを深く考えたり、自分の援助がどうであったか、振り返る視点が少し明確になった。
目指す幼児像が示されたことで発達の見通しを意識するようになった。この活動、遊びを通して育てている力をより意識するようになった。
幼児が今のような育ちがあるのか、またどう育てほしいのかを見つめ直しながら保育計画を立てるようになった。
<b>&lt;家庭や地域との連携&gt;</b>
小学校の先生や保護者などに子どもの育ちや学びについて理解してもらうにはどうすべきかを前より考えるようになった。
保護者、他校種の教員、この2つに対する説明力を向上させる必要があると、意識を強くするようになった。
家庭との連携を一層密にし、小学校以降の教育についての滑らかなつながりを強く意識するようになった。
社会に聞かれた教育課程ということで幼稚園教育で大切にしていることや子どもの育ちを保護者へ分かりやすく伝えられるように意識した。
小学校や家庭、若い先生たちに幼児教育で大切にしていること無意識にしていることを言語化して伝えるようにより意識するようになった。
<b>&lt;指導計画の作成・改善&gt;</b>
指導案を作成したり、計画していく中で、要領をより見て学ぼうとできるようになった。
長期的な見直しをもっと子どもの姿を捉え、保育計画を立てることを意識するようになった。
ねらい、評価をより深く考えられるようになった。預かり保育について考えるきっかけとなった。
<b>&lt;カリキュラム・マネジメント&gt;</b>
カリキュラムが多い中、なるべく子どもたちの主体性が成長できるようカリキュラムの見直しや職員での会議が増え意識が上がった。
もう1度保育内容、カリキュラム等を見直し、教育要領に沿っているか確認した。

保育の評価→改善という流れをこれまで以上に意識するようになったように感じる。
<b>&lt;幼児の非認知能力&gt;</b>
非認知能力の大切さなど、以前より意識しながら保育することが増えた。
諦めずにやり遂げることの達成感や前向きな見通しをもつことを意識して保育をするように心掛けています。
<b>&lt;その他&gt; 教員間の共通理解・5領域・プロセスの重視・預かり保育の在り方・特別な教育的支援の在り方</b>
教員間の共通理解…他の先生方と子どもの育ちや、発達の課題などについて、さらに語り合うようになった。
5領域…以前よりも各領域について保育と照らし合わせながら意識するようになった。
プロセスの重視…活動をする中で成功することだけを良しとしなくなった。失敗したり、成功に至らなくとも、それまでの過程を大切にす るようになった。結果はどうなっても、それまでの幼児同士の話し合いや力を合わせたり試行錯誤の経験の方が重要だと思ふようになった。
預かり保育の在り方…改めて考える機会とはなつた(預かり保育のあり方等)。
特別な教育的支援の在り方…障がいを持つ幼児や海外から帰国した幼児に対し、それぞれの幼児が個性を大切にされる保育をす ることが大切であると思つた。(周りになじむ保育ではない。個性を認められる保育)毎日の保育の見直しや評価を大切にしたいと思つた。

<b>P31 表 3-4 幼児の様子が変わつたと感じたこと</b>
<b>&lt;主体性の発揮&gt;</b>
子ども達との対話が増えたり、こんなことやってみたいと主体的に動く姿が見られるようになってきた。
自分で選び挑戦することで、できた時の満足感や達成感を味わえている。
子どもたちに情報を伝えることばかりになっていたことで、子どもたちも保育士の意見や話を頼ることがあつた。それが、自分自身で興味あ ることについて疑問に思い、そのことについて知ろうとする自発的な行動が見られるようになってきていると感じる。
子どもたちがなぜ? どうしたい? と自分の気持ちや、考える時間が増えた。
意識して保育し、関わることで、幼児が自分の思いを言葉や表情、動きなど自分なりの方法で表現するようになってきたように思います。
幼児自ら、遊びに必要な物を集めてきたり、新たな遊びを創造したりして、主体的に遊びに関わる姿が見られるようになった。
環境を改めて考えることで、より1人1人を大切に保育をしている。その事も含め自己肯定感の高まりを感じる
とても変化があつたということではないが、表情が豊かに主体的に取り組むようになったように感じる。
子どもに「○○するにはどうすればいいかな?」と声をかけることが多くなり、問いに対し、少しずつ子ども達で考えられるようになってきたと 思います。
教師の援助(声掛けなど)を変えることで幼児の姿がかわっていることに気が付いた。幼児は、自分の考えをもって活動に取り組んでいるこ とを以前より感じた。
<b>&lt;意欲の高まり&gt;</b>
子どもたちが活発に伸びのびと活動する様になった。園が活気にあふれて園生活を楽しんでいると感じる。
幼児の姿を肯定的にとらえていくことで何でも積極的に考え前向きになるため最後まであきらめない心が育つた。
個々の能力や性格に応じて対応することにより、子ども一人一人がより伸び伸びと活発に過ごせるようになったと感じる。
保育者が明確な願いやねらいをもって保育をすることで、子どもの興味、関心、活動に対する意欲が高まっているように思う。
以前はどこまで手助けするのか、など迷うことがあつたが、近くで見守り、必要であれば教師が励まし、かかわるようにしたことやってみよう という意欲やできることも増えた。
子どもを認める言葉や励ますことにより、子どもが意欲的で安心感をもって生活できるようになってきている。
先生主導の保育になりがちだったが、“子ども主体”と考えることで、子どもからのアイデアや意見がたくさん出てきて、伸び伸びと活動でき るようになった。
意欲をもって遊ぶようになった。次の活動を楽しみにして、保育がつながるようになってきた。
こちらの関わりが変わり、保護者が意識したことによって、子どもたちの顔がよりいきいきとして見える気がする。
この姿は子どもの発達のどの部分かなど意識しながら関わることで、あそびが続くようになり、「もっとしたい」という声が増えてきたように 感じます。
<b>&lt;言葉による表現、伝え合い&gt;</b>
自分の気づきをクラス全体に伝えたいという姿が増えている。
遊びの振り返りの中で友達の良さに気付いたり、自分たちで考え、工夫したりしたことなどを伝え合うことができるようになった。
思いをその子なりに表現するようになった。

自分の気持ちをお友だちに直接言える姿が見られるようになった。自分で少し考えてから行動が出来るように少しずつなってきた。
葉や実などの自然物がより身近な存在となり、色水や楽器にしたり、集めて量やかさ、重さを感じたり、虫の生態をじっくり観察し、言葉でのやりとりが増えた。
自分のことばで話す子どもが増えた。
発言する内容が深くなっているように感じます。
子どもが考え自分の思いを言葉にして出す姿が増えたと思います。(私自身が出すぎず、待つよう心掛けることを意識するようにしています。)
自分がしたいことを見つけ、すすんで遊んだり、自分なりの表現でいろいろなことを教師や友達に伝えようとする姿が増えた。
自分自身が育みたい力を意識して保育をするようになったことで、言葉がけや子どもたちへの問いかけが具体的になり、子どもたちの思考力や言葉で表現する力に成長が見られるようになったと感じています。
<b>&lt;協同性の育ち&gt;</b>
ドキュメンテーションをよく取り入れるようになったことで、自分たちの遊びを思い出して楽しんだり、友達の遊びに興味を持って参加したりするようになりました。
子どもたちで声をかけ合い、協力しながら活動や遊び、生活を進められるようになった。
ひとりの気付きに他児も考えを話し、子ども達同士でよりよいと思う考えを見つけていくような場面が見られるようになってきた。
環境(教材、自然、空間など)へのかかわり方、教師や友達へのかかわりが積極的になり、日々の経験が自分の中のためこみになっているように思います。
子どもたちが、自分たちで声を掛け合い行動することが増えた。
のびのびと自分のしたいことをできる環境のもと、自主、自立面や、友だちと力を合わせて1つのことに取り組む協同性もより育まれていると感じている。
園生活の流れを覚え、自分から取り組んだり、友達に教えたりする姿が多く見られるようになってきた。
園外保育などでも教諭が事前に学び、きちんと育てたいことを意識することで、子どもたちにもより多くの情報も与えることもでき子ども同士考えたり、活動の範囲がより広がったと思います。
個々に力量差はあるものの、友達の姿をモデルにし、お互いに育ち合う姿が見られるようになってきた。
自分からやってみようとする姿や、友達と力を合わせて何かをすることを楽しんでいる姿がより見られるようになった。
<b>&lt;遊びこむ姿&gt;</b>
考える力、行動する力が身につけてきているように感じる。
主体的・対話的で深い学びができつつあるのではないかと感じている。(いろいろなことに興味・関心を持ち、思いを伝えようとしている。)
友だちとの話し合いを積極的におこなうようになり、遊びの内容が深くなってきている。
幼児が遊びや活動を振り返る機会が増え、遊びが深まっているように感じている。
自分たちで遊びを組み立てたり、思い思いに活動に没頭する姿に変わったと感じる。
遊びを発展させていく気付きが多くなった。
じっくり取り組む姿や人との関わりが増えた。
子どもの主体的な活動が増えることで一人一人の個性が顕著に表れているように感じる。何かをあたえられた遊びよりも主体的な遊びを通しての学びが深く考える力へとつながっていると思う。
遊びの中での幼児の楽しんでいる様子から必要な援助をしていき、いかにじっくり楽しめるかを考えてきたところ、じっくり楽しむ幼児が増えてきた。
行事を精選し、遊びの時間を確保すると、自分のしたい遊びを継続してする姿が見られるようになった。
<b>&lt;試行錯誤・工夫&gt;</b>
遊びが継続することが多くなった気がする。また、しばらくたってまた、前にしていた遊びの要素が出てくるが多くなって、遊びを自分のものにしていくことが増えた気がする。
「先生〇〇作って～」と他人にたよる姿から、「〇〇したいから。一を出してほしい」と話すようになり、友達と工夫して楽しむ姿が見られるようになりました。
自分なりに考えたり、試したりしながら行う場面が増えてきたように感じる。
遊びの中で、友達同士で気付いたことを話し合ったり、伝え合ったりし、さらに目的に向かって挑戦したり試したりするようになりつつある。
主体的な保育の中で、子ども自身が学び、考え試しながらいろいろな物事に取り組んでいく姿が見られるようになった。
保育者が子どもを見守ることにより、子ども達の試行錯誤する姿がより増えたように感じる。
好きな遊びの中で、自分の考えや見通しをもって楽しもうとする姿が見られるようになった。また、その中で、互いの気持ちを出し合い、協力したり、試行錯誤したりする経験を重ねてきている。

<p>幼児がじっくりと遊べるように環境を見直したことで、試行錯誤しながら、遊ぶようになり、幼児、自ら考えるような場面が多くなってきている。自ら気づき、試してみようとする姿や、子どもが主体的に動いたり、遊んだりしているなど実感できることが増えたと思います。</p> <p>勝敗を、数を数えて決めるなど、子どもたちの遊びの中で変化があった。</p> <p>自分から遊びに取り組んだり、「こうしたい」「これは？」と考えたり試したりする姿が増えたように感じる。</p>
<p><b>&lt;好奇心・探究心&gt;</b></p> <p>子どもの知りたい！なぜ？という気持ちがよく見られるようになったと感じる。</p> <p>じっくりと取り組む(探求する)機会が増えた。</p> <p>遊びや生活の中で幼児が様々なことに興味を示し、楽しむ姿が増えた。</p> <p>遊びや環境を通して興味関心が広がり、自ら学ぶ力につながってきていると思う。</p> <p>子どもと共に調べたり考えたり、体験することで興味の広がりを感じた。</p>
<p><b>&lt;自信&gt;</b></p> <p>いくつかの経験をしながら次の活動につなげる過程を大切にすることでできることだけがいいことではなく、やってみようとしたことが自信につながっていた様子があった。</p> <p>「主体性」がある子は自信をもって物事に取り組める。ように思う。</p> <p>認め言葉がけが多くなり、子ども達が自信をもっていきいきと遊ぶようになった。</p> <p>子どもが自分達で考え、行動することを大切にすることで、次への意欲や自信をもつようになった。</p> <p>子どもと話し合っ決めてる機会を増やしたことで受け身でなく自分たちで考える、決める、選ぶ体験を重ね自信になっていると感じる。</p>
<p><b>&lt;様々な気づき・発見の喜び&gt;</b></p> <p>季節の移りかわりや、自然物(虫・花など)への興味や気づきが増えてきている。</p> <p>会話が広がり、色々な物・事によく反応し気づきが増えてきた様に感じる。</p> <p>子どもたちが自主的に図鑑を持ってきて調べたり、行動しようとしたりする姿が多く見られるようになったと思う。</p> <p>様々なことに気付いたり、発見を喜んだりして、自分からかかわろうとする姿が増えた。</p> <p>遊びや生活を通して、発見する喜びを味わい言葉で伝えようとするようになってきている。</p>
<p><b>&lt;思いやる心の育ち&gt;</b></p> <p>遊びの振り返りの中で友達の良さに気付いたり、自分たちで考え、工夫したりしたことなどを伝え合うことができるようになった。</p> <p>子ども達が感じたことや考えを言葉で表現できるようになり、そういう環境の中で自分の思いを伝えられなかった子も言えるようになってきた。また、友だちの思いを受け止めたり、認めたりする姿も見られるようになった。</p> <p>「道徳性、規範意識の芽生え」の点を意識し、保育をしてきたことで自分の行動を振り返ったり、相手の立場に立って考えたりする幼児が育つように思う。</p>
<p><b>&lt;その他&gt;自分への向き合い・振り返り、次への見通し・集中力の高まり・相手の気持ちの受容 ・安定した情緒・就学への意識</b></p> <p><b>自分への向き合い</b>…失敗や「まちがえた！」と感じることに対して、前は落ち込む幼児や切り替えにくい幼児が多かったが、そこに楽しさを感じ、「またやってみよう」としたり、「もう1度挑戦するぞ！」と繰り返し取り組んだりする幼児がふえた。</p> <p><b>振り返り、次への見通し</b>…自分で考えたり、見通しを持って生活しようとする幼児が少しずつ増えてきた。</p> <p><b>集中力の高まり</b>…遊びの充実を考えることで、より子ども達が集中して遊ぶようになった。</p> <p><b>相手の気持ちの受容</b>…振り返りを重視することで、幼児同士での他者との考えの違いの気付きや遊びの継続で幼児同士で話し合う、協力する姿が変わってきている。</p> <p><b>安定した情緒</b>…子どもを認める言葉や励ますことにより、子どもが意欲的で安心感をもって生活できるようになってきている。</p> <p><b>就学への意識</b>…小学生、小学校との関わりがより身近になり、関心を持つようになった。</p>

**P32 表 3-5 新幼稚園教育要領に基づいた保育を展開する際の困難さ**

**<新幼稚園教育要領の理解や実践>**

全ての活動に対して、新幼稚園教育要領を意識できていないところがあるため、常に意識しながら定着させていくところが難しく課題。また、振り返りの観点も少し難しい。

幼稚園に勤務して1年目であるため、新教育要領をよく読んで意識はしているが、実践しようとすると、まだ全体的に難しく感じ、悩むことも多い。

教育要領全般を理解し、取り入れた保育の実践をするため、自主的な研修の必要を感じる。
自分でまだまだ全体的に要領や保育の基本を理解したり、行ったりすることは難しいので、実際に保育して目の前の子どもたちとの毎日から学んでいると思います。
新要領に基づいて保育を見取ろうとすればするほど、遊びが多様なことに気づき、さらに多様さに寄りそい、引き出していくことが難しいと感じる。
研修等で学んだ幼児教育の質の向上につながる保育が実際の保育の現場で思うように行えずに葛藤を抱えながら行っている。
保護者が求める園のイメージや希望があり、新しく変えていくことがなかなか難しい。
日々の保育の中で意識して取り組んでいる項目とできていない項目でかたよりがでてしまう。促え方の違いがあったりする。理解を深めていきたい。
それぞれの項目が、以前の教育要領と大きく違いを感じてはいないが(根本とする所は、同じであったり、大事さを示すことは分かるが)、言葉の置き換えに少し整理が必要だと感じることもある。
新幼稚園教育要領と実際の保育では、現実には差がある。教育要領にのっとり・・・と思っても、市の雰囲気、園の雰囲気により、実行に移せないこともある。
<b>&lt; 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の理解や実践 &gt;</b>
10の姿の活用の仕方、小学校との連携、保護者への周知が難しく、幼稚園教育の良さをアピールすることが難しい。
10の姿を基に保育に取り入れたい内容はあるが、現実的には難しく項目ごとに取り入れ方に偏りがある。社会生活とのかかわりや文字・数量などは特に年少ではほとんど扱えなかった。
10の姿を実際の保育にどうつたしていけばいいのか、考え方やとり入れるポイントを具体的に知りたい。
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に至るまでの過程の姿をどのように捉えたらよいか難しい。日常の幼児の姿から具体的に結びつけていくことができていないと感じるため。
「数量や図形、標識や文字などへの関心、感覚」は、今までにもやってきていることではあるがそれが今回の10の姿の中でイメージされていることと、自分がしていることのつながりをまだ自分でとらえられていないこと。
幼児の学びを何でもかんでも10の姿につなげようとしてしまう。浅い学びでも、そこにつなげてしまうことで安心してしまう危険性もあるのではないかと感じることもある。
10項目の育ってほしい姿は幼小連携ではつながり、わかりやすくなっているものの、指導計画の見直しで10項目に関連づけた時に普段の保育の中ではバランスが取りづらいことがある。
資質・能力を育むという考え方、及び10の姿が到達点ではないといいながらも、そのように捉えられ協議される流れがあることが問題と感じています。現場での解釈や理解も様々なので、せめて研修では真の意味が伝わるような機会をもてたらと思います。
まだ慣れないため、困難に感じるところがある。幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿が明確になった分、その子をひっぱりあげる対応をしてしまうことがあるので、気をつけなければいけない。ありのままの姿を受けとめる大切さと指導してしまう自分が混在している。
10の姿のために活動を決めるよりも、活動を10の姿に当てはめてしまうことが多い(新教育要領についてじっくり話しあう時間がとりきれない)。
<b>&lt; 具体的なイメージ・指導方法 &gt;</b>
保育の中で、地域や文化、伝統に関することを交えて、具体的に何をしたら良いか、イメージがつかみにくい。
言葉による伝え合いの育まれる基盤の具体的なイメージがつかみにくい。
社会生活との関わりの具体的なイメージや保育への取り入れ方が知りたい。
健康な心と体の具体的な指導方法が知りたい。
より具体的にになったが、自立心や協同性の部分での具体的な方法を知りたい。
特別な配慮を必要とする幼児への具体的な方法が知りたい。
「学びに向かう力」を意識していきたいが、具体的な方法や取り組みをもっと知りたい。
風の音や雨の音に気づく。活動として、楽しめる具体的な方法が知りたい。
視聴覚教材やコンピュータなどの情報機器の有効活用する具体的な方法が知りたい。
「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」のための具体的な方法が知りたい。
<b>&lt; 小学校との連携・接続 &gt;</b>
10の姿の活用の仕方、小学校との連携、保護者への周知が難しく、幼稚園教育の良さをアピールすることが難しい。
小学校接続とのイメージがつかみにくい。自分の小学校の頃とは全く変わっているところがありこれが当たり前と思っていることが違うことが多々ある。教育要領に基づいた保育をする際、具体例があるともっと保育がしやすくなるように感じる。
幼児教育の重要性を他(地域、他園、小学校、中学校)へと発信していくことの難しさ。
幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続をどのように図っていくか具体的な方法が知りたい。
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が示されたことでそれを元に小学校教諭と話をする機会も増えたが、伝えていく難しさを感じている。



幼稚園と小学校教員がもつ5歳児終了時の姿がなかなか共有するのが難しいこと。
外部の方に遊びの中での学びや育ちの大切さを伝えることが難しい。
10の姿について、幼稚園と小学校の捉え方が少し違うような気がします。
幼保と小学校の接続の強化を言われているが、私立と公立で差があるように感じます。
小学校との連携がもっと深く必要であるが、互いに理解合って、保育内容や育ちを語ったり、見たりするところまで深まりにくい。
<b>&lt;振り返りや評価方法&gt;</b>
幼児理解に基づいた評価の実施について、職員一人一人の教育観が異なるので、評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫をすることが難しい。記録の取り方、園内研修の進め方など、具体的な方法が知りたい。
幼児理解に基づいた評価のあり方について、園内で検討してはいるものの、どのように取り組んでいくべきかに悩む。
記録・振りかえりをする中で、分かりやすく且つ効率もよくできる方法が知りたい。
今回、評価について新たに明記されたが、もっと評価について具体的に知りたい。
幼児の姿を捉える視点が多く、評価への取り入れ方を難しく感じる。
写真や動画は、プライバシーの課題もあるので、取り入れ方が難しいと思います。
エピソードや写真などで幼児の姿を捉えることはあるが、動画の活用は保育の都合上、毎回撮影することは難しいと感じます。
自分自身が記録をとって行く中での子どもの見取りがどうなのか、振り返る視点が正しいのか。
ドキュメンテーションなど、保育の振り返り方法を限ってしまい、様々な方法を日頃から行うことが困難。
評価の妥当性や信頼性を高めていくことについて。
<b>&lt;時間確保&gt;</b>
子ども達が主体的に動けるような保育をする時間や環境が作れていない。現在行っている行事を見直すか、行事の中に取り入れていくか悩んでいる。
保育以外の仕事(業務)が多く、保育準備をする時間が足りない。
エピソードや記録に残す時間を日々の勤務内で取ることが難しく、ゆっくと記録に残す時間の確保が課題である。
行事もあるため保育に取り入れるのが難しい部分もあります。(時間が取れなかったり)
書類等の書き方や様式が変わると一から作らないといけないので大変。時間がない。
自分の保育(言葉かけ、環境)などに落とし込んでいくことが難しい。何度も何度もしみ込むまで読むべきだと思うが、時間を作れていない。
勉強する時間がない(仕事量が多い)。
教育要領が新しくなるのは良いが、先生としてのゆとりがない保育に困難を感じる。話し合いの時間等多くとれない。又教育要領についての共通理解等の研修時間や環境を考え設置する時間も勤務時間内でやりたい。
経済的、時間的に余裕がない。
年長児は他学年に比べて行事が多く、行事が幼児の生活にうるおいを与えるものとなるよう配慮しているが、どうしてもそれをこなすことに一生懸命になってしまい、新要領に基づいた幼児理解ができていないように感じている。
<b>&lt;幼児主体の保育&gt;</b>
カリキュラムの中で合間をみて遊ばせ、十分に子どもたちが主体となって取り組める充実した活動に十分に時間がとれず、保育計画をたてるのに悩むことが多くある。
幼児の主体性と教師の意図をバランスよく組み合わせ生活をつくっていくこと。
どこまで見守り、どこまで声をかければよいか、加減やタイミングに悩んでいる。
主体的な保育の取り組み方の様々な例が分からない。
自由あそびの時間を十分に確保し、継続して遊び経験を大切にしたいが行事前など時間によっては難しい。
教師の思いや考えで、きめつけてしまいがちな所があり、幼児理解の視点で遊びを見ようとするが、教師の援助がむずかしい。
子ども主体の保育の進め方はいろいろな方法があると思うが、保育を展開していく上で、どのように広げていくことで子どもたちの学びになるのかが分かりづらくて難しい。
子どもたちの主体性や探究心を出来るだけ受け止めたいと思っていますが、クラスの保育の中で方向が様々である時に、場合による全てを見守ることが人数的に難しいと感じることがあります。
子どもの主体性を引き出すことに困難を感じるがあります。10の姿と結びついているのか、教師の関わりが多すぎる時があるのか。待つ、見守るタイミングについて悩む時があります。
行事に取り組む活動の中での子どもの主体性をどうやって引き出していけばいいかという点。
<b>&lt;保護者の理解推進&gt;</b>
保育自体は、これまで大切にしてきたことと変わりなくできているが、その大切にしてきたことを保護者や小学校に理解してもらえるように説明することに難しさを感じる。

10の姿の活用の仕方、小学校との連携、保護者への周知が難しく、幼稚園教育の良さをアピールすることが難しい。
“数量、図形、文字等への関心、感覚”において、幼稚園と小学校で方針を共通理解できるよう話し合ったが、その認識を保護者にも浸透させるのが難しいと感じる(各家庭様々な習い事や勉強を子どもにさせているため、個々に差が出て、こちらの思いとのずれが生じる)。
長期継続してきた行事などの促え方、内容などについてどのように考えていくのが良いか。又それらに対する保護者の期待、イメージへの応え方など。
10の姿を到達目標ととらえがちな保護者への説明が難しい。
<b>&lt;10の姿/5領域/3つの柱の関連&gt;</b>
3つの柱、10の姿、5領域を関連させながら考えていくのが難しい。
「資質・能力」「10の姿」「5領域」と、目指す方法がたくさんあり、様々な経験や活動内容を意識してはいるが、全てを意識して保育することに難しさを感じる。
五領域と3つの資質・能力と10の姿の視点をどう整理、意識し活用していけばよいか。
「幼児教育において育みたい資質・能力」の三つの柱のイメージがつかみにくい。自治体独自の教育構想(理念)もあるため、「三つ柱」「10の姿」「5領域」などの理解、把握が自分自身が未熟である。
5領域と幼児期の終わりまで(10の姿)と色々な領域や視点があり、結局、どこを目指して保育すればいいのかが、ぼやけてしまっている。
<b>&lt;社会に開かれた教育課程&gt;</b>
社会に開かれた教育課程(改訂の基本方針)というのがよくわからない。
社会に開かれた教育課程の具体的な内容が知りたいです。
社会との連携及び協働という部分の具体的な内容、方法が知りたい。
今までやっていた事が文章化されただけのように思う、地域との交流は、なかなか機会がもてずにいる
社会に開かれた教育課程の実現とは、具体的にどのようなことなのか、社会に貢献できる人材をどのように育てていくのか、具体的な方法が知りたい。
<b>&lt;カリキュラム・マネジメント&gt;</b>
カリキュラム・マネジメントの具体的なイメージがつかみにくい。
カリキュラム・マネジメントの取り組みがまだ十分と言えず、保育の質の向上のために指導計画を見直さなければならない。園全体でまだ十分協議できていない。
各領域に合わせた細かな指導案の作成について年齢によっては領域ごとに分けて考えることについて難しく感じることもある。
教育課程及び評価への盛り込み方が難しい。
教育課程を見直す時に領域と10の姿の関係をどう表すのか具体的な方法を知りたい。
<b>&lt;園のカリキュラムとのずれ&gt;</b>
園の教育方針とのつながりが難しい。
園のカリキュラムが新幼稚園教育要領に合わせて変えていくことが難しい部分もあり、保育をすすめていく上で自分の中でも迷いがある。
「主体的」な活動を今のカリキュラムに入れていくことが難しく、どのように取り入れるのか園全体で統一していくことがなかなかできていない。
遊びを中心とした保育をして、非認知的能力を育てていきたいが、園のカリキュラムでの〇〇教室や教材などにより、時間の確保が難しい。
今までの保育のカリキュラムのままでは、十分に遊びを展開できる環境を作ることができない。
<b>&lt;教師の力量不足・経験不足&gt;</b>
自分の力量がまだまだ不足しているので、これからも新幼稚園教育要領に基づいて保育を計画していくことを努めていきたい。
しなければならないことが多く、自分の力不足のため困難と感じることが多い。
子どもの遊びの見取りが、自分は本当にできているのか、その後の成長へつなげられる手立てが出来ているのか、不安であるし、とても難しい。
幼児の姿からの読み取りが自分自身浅く、保育の不十分さを感じている。
教師の得意、苦手な分野があるため、偏りなく保育ができるようになりたい。
<b>&lt;環境の構成&gt;</b>
環境を整えること。(好奇心、探究心、主体性 etc を引き出す環境)
好きな遊びの環境構成が難しい。
遊びの質を高める教材作りを考えたい。

<b>&lt;個々に合わせた保育&gt;</b>
幼児の個々の実態の違いが大きいため、保育をするにあたり、ねらいや内容をかみくだいて実態に沿うように組み立てるのが難しいと感じる。
これまでと同じやり方ですればよい、ということではなく、その時の子どもの姿に合わせて資質・能力を育むための方策を考えないといけないので難しい。
今までも、その子にとって、このクラスにとって最善のかかわりを心がけてきた。基本は変わらないと思う。
<b>&lt;深い学び/学びを意識した遊び&gt;</b>
遊びの中でどのように「深い学び」を読み取っていくのか、難しい。
主体的で能動的な深い対話をつきつめていくと、もっとカリキュラムを変えていかないとという考えや、少人数の方が成り立ちやすいだろうと思う。
文言を理解した上で保育に展開していくことが難しい。例えば“主体的・対話的”というところも具体的な場面で意図した環境を整えるなど。
<b>&lt;教員間の共通理解&gt;</b>
全体的な計画の作成に向け、職員一丸となり、取り組んでいるが、一人ではできないということが分かった。今後も園内研修やその他の研修に参加し、カリキュラム・マネジメントについて学んでいきたいと思う。
人それぞれに内容のとらえ方の差を感じています。自分自身も、整理できていないと思います。
大まかな部分が多いので、教師によって捉え方が違い、研修等の話し合いで、自分の考えと合わない時がある。難しい。
<b>&lt;預かり保育&gt;</b>
預かり保育の時間ですごく幼児の増加、利用する保護者の数の増加により、教育時間外の自分の役割、仕事量も増え「新幼稚園教育要領に基づいた保育を展開する」という意識をしっかりと持たなければ…と反省の日々です。
教育時間と預かり保育との連携の難しさを感じる。
預かり保育実施における担当との連携や保護者との連携を探っている。
<b>&lt;その他&gt; 幼児指導要録の書き方・特別な教育的支援の在り方・教員数/配置</b>
幼児指導要録の書き方…新幼稚園教育要領にかわり、幼児指導要録の書き方をどのようにしていけばよいか、今までとの書き方の違いがわかりにくい。
特別な教育的支援の在り方…支援が必要な子に対する関わりが少し難しい。
教員数/配置…ねらいや主体的な姿を求めた保育を展開するが、人員不足、時間がない中で負担が大きい。